

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可
平成18年8月1日発行 毎月一回 一日発行
俳句雑誌 沖 第37巻第8号

沖

俳句雑誌[おき]

8月号

沖 発行所

崎戸島

能村 研三

宗左近先生を偲ぶ

詩人の宗左近さんが六月二十日に亡くなった。

宗先生は、東京大空襲で手を取りあつて逃げたのだが、焼死した母への鎮魂をこめた連作詩集「燃える母」で1968年に歴程賞を受賞。縄文土器を通じて戦死者たちの世界とつながろうとする「縄文」シリーズを精力的に発表した。

また、作曲家の三善晃氏と組んで全国各地の校歌の作詞をされた方でもある。芭蕉や一茶などの研究をはじめ俳句への関心も高かった。

「沖」との関係も深く、二十五周年の記念大会の折には記念講演をお願いし、その後も記念号の度にご執筆をいただいた。先師登四郎の良き理解者で、ふらんす堂から出版された『人間願歌』の採文「春の槍」の一文は味読したい名文である。その最後の部分を紹介する。

「じつに、人間がいる。その人間は傷んでいる。その痛みを通して、大地の生命、自然が滲みこんでくる。しかも、その滲みかたの、何と艶なことか。これこそ、真の文芸の醍醐味である。」

登四郎が第一回目の「市川市民文化賞」を受賞したときも、絶大なこ

夏空にあばら透かしの炭廃墟

茂り葉に景の柔らかく炭廃墟

寧日の「1 鉱煙突」土用あい

茅花流し炭住廃墟聳え建つ

緑覆ひわらべ帰りの古煙突

地ぼてりに炭車人車の置かれあり

井上光晴の小説「地の群れ」

「地の群れ」の叫びは凧ぎて海霧深し

「海塔新田」その名の今は青岬

夏匂ふ石積み塀の蛭の路地

白南風や今風ぎ時の崎戸島

推奨をいただいたと聞いている。そして、先師が亡くなった時は、弔辞をいただき、読売新聞に追悼文までお寄せいただいた。

私も、公私共に親しくしていただき、文化課長時代の初めての仕事として第一回目の「市川の文化人展」に「宗左近展」を開催できたこと、三善晃先生とのコンビで「市川賛歌・透明の蕊の蕊」をお作りいただき、その作詞原稿を軽井沢の別荘まで取りに伺ったことなど、その思い出はつきない。昨年あたりから、市川の文芸人が集まる「風の会」を宗先生を中心に立ち上げ、私もその末席に入れていただき、「沖」の数人の同人との作品批評会を開催したことも良い思い出となった。

能村 研三



湖 畔 林 翔

夜逃げ

此の世の名残、夜も名残、死にに行く身を譬ふれば仇が原の道の霜、一足つつに消えて行く夢の夢こそ哀れなれ。あれ数ふれば晝の七つの時が六つ鳴りて、残る一つが今生の鐘の響きの聞き納め、寂滅為楽と響くなり。

近松門左衛門作「曾根崎心中」の名文句だが、私の家の近所に起こった夜逃げ事件は、そんな色っぽいものではない。

私の家の二階から見える所にごみ▲▲の集積所があるが、毎朝のように半白の老人が大きなごみ（概ね箱入りの物、抽斗など）を持って来て金網の外に置いてゆく。何だろう、これから引越す為に不要の物を捨ててゆくのかと訝っていたが、近くに住む娘がそのわけを聞きつけて来た。半白の老人は家主で、店子の一家が家賃を溜めに溜めた拳句に夜逃げをってしまったから、残っていた家財

芦の湖にかそけき波やほととぎす

老鶯や湖水は蒼をかがやかせ

老鶯の昂れば声きりきりと

山巔を低しと夏霧湧き昇る

湖の仄むらさきの夜涼かな

明け易の木の間隠りやあれが湖

朝富士やかしづき仰ぐ梅雨の雲

湖の水舐めさつと梅雨の蝶

溜息と聴けば聴かれて梅雨鴉

梅雨は霽れ緑の炎立ちあがる

を^{ごみ}として出している由。

分別もせずにただ積み重ねてあるので、市役所から塵芥^{ごみ}収集車が来ても持つていつてくれない。目障りで仕方がないから、私が分別して、燃やすごみの日にはそれを指定の袋に入れて金網に収め、燃やせないごみの日には又それを指定の袋に入れて金網に収めるという風にした。プラスチック類も同様である。抽斗は大きくて指定の袋に入らないから、燃やすごみの日に、金網の外に立て掛けた。妻は病中で手伝えないから私一人でやった。

林 翔



蒼茫集



土 偶

北川英子

発条 秤

辻 美奈子

祝 南信濃支部十周年

青葉若葉樹齡十年の枝の張り
瑠璃鳴くや千代に八千代のさざれ溶岩
山紫水明暮れて濡れ身の初夏の月
五千年も妊みて土偶緑さす
麦秋の母郷に集ひみな喪服
梅雨夕焼のまつはる魼の片翼

鬼 瓦 秋葉雅治

翠巒の襞くつきりと田水張る
天指せる秀に夏霧らふ御柱
上社より下社に諏訪の青しぐれ
青梅雨や寂びて威を張る鬼瓦
毗に紅のひとさし祭髪
父の日や鉄拳しのぶ握り飯

万緑や赤子をはかる発条秤
切株に樹液溢るる薄暑かな
親亀の上亀の子のわれもわれも
国生みのごとく植田の泥しづく
椎の花人と生まれてややくしく
をさなさの祭の中をひた眠る

水郷紀行など 梅本豹太

卯の花腐し用なき電話娘より
いい顔の老人に遇ふ麦の秋
冷酒や猪の時分にまた来いよ
彼方あっちにもひよいとむぐつちよ舟遊び
船頭の顎がをしへて鳩浮巢
艚べそまた外す船頭行々子

青 梅 大畑善昭

路採りの妻の早立ち山晴るる
父の日といふ一日のこそばゆし
青梅に自然淘汰のあり育つ
下水道工事人骨も出てついで
四つに組みしが飛ばされて兜虫
墨糸をぱちんと弾きにいにい蟬

夕 星 上谷昌憲

モナリザの日の鳶色に梅雨兆す
時の日の路面電車の機嫌かな
宵まつり三人寄ればもんじや焼
折畳み傘などたたみ父の日や
洋食にチエリー和食にさくらんぼ
夕星深澤吉田明さんやリラ冷ことのほかするき

祭 来 る 坂本京子

伐り口の香る青竹祭来る
口角の泡も生きいき生ビール

背に腹の替はるかけふの夏嵐
蛇衣を脱ぎつややかな紋どころ
時折は懈怠の揺れを今年竹
十葉の闇に縋れるほのあかり

浜の反り 望月晴美

ゆつくりと闇が濃くなる白菖蒲
どことなく風に手ごころしやぼん玉
夏帽子かぶりてよりの氣勢なり
羽抜鳥背を張るしぐさ矢はず
身につけしおぼえなきもの土用干
九十九里素足にかなふ浜の反り

植 樹 祭 辻直美

二人暮しは花莫座の奪りかな
遊ぶ子を待てば夏炉の尉白し
皇后の帽子のみどり植樹祭
蟬の穴兵器につきし雷の文字
山藤の咲いて大樹を羽交締め
滝守に振舞はれたる丸木椅子

潮鳴集



信 濃

矢崎すみ子

立夏かな信濃は水の生るる国

朽立ちの孤高の一樹夏の霧

一輪は天上に置く峰桜

夏霧にくぐもる青き鳥語かな

坪庭は神の掌峰桜

沸 点

中島あきら

麦秋の沸点として赤ん坊

穂の芽や風の指先やはらかく

香水の空恐ろしきことを言ふ

同根にして背き合ふ百合の花

湿るほど闇深くあり初蛩

青 田 風

鈴 掛

穂

鱒刺や真つ逆さまといふ快樂

担ぎ胼胝見せては老の夕端居

青田風筑波は島のごとくあり

一面の木洩日浄土しやがの花

手掴みの鮎月光をしたたらす

二 世 帯

鈴 木 恭 子

ほたるぶくろ覗き優しき眼となりぬ

反抗期素あしに翳りなかりけり

二世帯の真中に鶏舎麦熟るる

父の日の夫に生菜入りの酒

サングラスより始まりし民主主義

沖作品



能村研三選

東京

中田とも子

齊藤 實

菊地 光子

黒牛のやうな六月ぬつと来る
霧分けて老鶯の声曲らずに
滝道に人声はみな弾みをり
草矢射る信濃の空の深さかな
栗の花みんな仲良しとはいかず
じやんけんに五月の風の握らるる
豆飯の冷めて昭和の味したり
日の緑影の翠に五月来る
生きものに絶滅危惧種泣うちわ
夕立も天与の運よ男どち
桜桃忌喫煙室の二重ドアー
滴りを受く手の窪の生命線
薫風やどこへ行くにも橋越えて
新樹光欄干の丹の重ね塗り
黒南風や瓶を出られぬ帆掛け船

めそめそと暮れてしまひぬ柏餅

言ひ分けの底も尽きたる御祓かな

(金丸座二句)

黴の香の奈落に江戸の暗さかな

万緑へ開いてゐたる鼠木戸

朝風の舟屋に乾く産着かな

万緑の星は宇宙に浮く毬藻

孤独てふ力ありけり麦の秋

繭蔵に和紙のあかりや藤の雨

夏きざす波音砕く波の音

青柿の次郎になれず落ちにけり

洗車好きにこのごろ卯の花腐しかな

書を曝すラーメン橋はたトラス橋

名づけたる去年の墓か出できたる

ダ・ヴィンチの手稿あるやも書を曝す

薄暑かな築地別院異国めき

石川 笙児

七種 年男

服部 早苗

埼玉

沖作品 15 句選評

*

能村研三

黒牛のやうな六月ぬつと来る

中田とも子

五月は明るく輝かしく、また七月は炎暑のイメージがあるが、六月はどこか曖昧な印象の季節である。黒南風といわれる雨気を含んだ陰湿な風が吹いて、梅雨のじとじとの感じがいつまでも続く。その六月の季節感を作者は独特の感覚で捉えた俳句の表現では、平凡な比喻は面白くないが、この喩えはおもしろい。牛は、馬と同じように大きいのが穏やかな表情をしている。黒牛は主に食用とされるため、他の牛より肥えているためその動きもやや緩慢である。中には闘牛に使われる逞しいものもあるが、柵から顔を突き出して見つめられると、牛の鼻から吹き出る熱い息に、改めてその存在が大きいことに気付く。「ぬつと」という擬態語もうまく利いている。

豆飯の冷めて昭和の味したり

齊藤 實

卓袱台という「一つ食卓をみんなで囲む」というのが、昭和の時代の一般家庭のライフスタイルであった。その卓袱台も昭和五十年代に入るとダイニングテーブルに変わりはじめ、いまや日本の家庭はほとんどがダイニングテーブルになっている。卓袱台を囲み、家族が団欒をとり、会話をかわした。よく母親の作ってくれた豆飯もなつかしい。ちよつと塩味が効いていて

食欲がそえられるもので、家族そのものの味である。昨今は核家族化が進み、そんな団欒の機会も少なくなってしまう。昭和が遠くなつてゆくことへのしみじみとした感慨が述べられている。

桜桃忌 喫煙室の二重ドア

菊地 光子

太宰治は相당한ヘビースモーカーだったようで、ゴールデンバットを毎日七、八箱吸っていたそうだ。よく目にする写真も苦悩と模索の時を過ごしながら、煙草の煙を吐く姿が印象的である。最近では、煙草好きの人にとっては、肩身が狭い思いをされているようだが、喫煙室に追い込まれた人々は今や二重ドアの向こうに追いやられてしまった。二重ドアからヘビースモーカーの太宰治へとイメージを広げられたのがおもしろい。

めそめそと暮れてしまひぬ柏餅

石川 笙児

この句では、めそめそしているのが、子供とも、大人とも言うていない。しかし、下五の柏餅から、その子が男の子であることがわかる。男なのだから、いつまでもめそめそしないでなどと言われたものである。いつまでも気が晴れぬまま、日が暮れるころになつてしまった。きつと柏餅を手にして機嫌をとり直したのだろう。

繭蔵に和紙のあかりや藤の雨

七種 年男

明治初期から昭和初期にかけて養蚕業、製糸業によつて栄えていたまちには、繭蔵がある。時代の変遷によつて産業も移ろい、現在には残された繭蔵などからかつての繁栄をたどれるのみである。木造、二階建という大きな蔵もあつて、梁などの構造部材は細く、胴差も筋交もなかったが、壁土の中に塗りこめられた貫によつて耐えてきたそうだ。今では、ギャラリーや洒落たレストランなどに転用されているようだが、和紙を使つたあかりが建物にびつたりあつた(以下略)